

2011年 立山登山ウォーク

(2011年8月27日)

ゼッケンNo. W374 山猫@滋賀

はじめに

例年通り、5月はじめに「立山登山マラニック」の案内が送られて来たので参加申し込みをする前にホテルを押さえた。今回は「桜橋ビジネスホテル」で、一泊3300円だった。富山のホテルは安い。その後、参加させて欲しいという気持ちを込めて申込みを行った。

7月初めに参加許可の案内が届き、その中にマラニックの部298名、ウォークの部113名、合計411名の申込みがあり、参加許可したのは300名以内と書かれていた。年々落選者が多くなる大会で、立山・室堂は知れば知るほど、どうしてもここに来たくなってしまう何かがあるように思う。標高が2450mもありながら、地獄谷も温泉もある。日常世界があまりにも小さなもので、ここにいると時間も文明も忘れてしまいそうになる。

大会はさくら道にも出なくなったので、歩いて進める大会「立山登山マラニック」だけが唯一参加できる大会になっている。とりわけ苦しくて危険でもあるが、これほど楽しい大会はない。8月末が待ち遠しくてならなかった。暑いところから、この世の極楽地が待っていてくれる、そんな心境だった。

昨年は岐阜から高山本線経由で富山入りした。何もない駅での長い乗り継ぎ待ち、頻繁にある特急電車とのすれ違い待ち、自販機すらない無人駅等々を11時間も掛かると新しい飛騨の自然との遭遇という楽しみはあったが、さすがに長過ぎて辛かった。今年はいつも通りのコースで、途中の福井でヨーロッパ軒に立ち寄って、早めに富山入りすることにした。今年の夏休みは12日から21日までであったが、10、11日を墓参りで休み、前日の25日も神社の当番で休み、8月は4日も年休取得したので、職場では休みが目立ってしまった。

前日

8月26日は7時過ぎに家を出る。琵琶湖線から湖西線の新快速に乗り換える場合、山科で乗り降りすれば良いが、敦賀行きの場合は混雑が予想され、山科からでは座れないこともあるので京都までバックして乗ることにした。京都だったので座れたが、この時点で満席となり、もう立っている乗客もいて、山科からでは100%座れなかった。それ以降、敦賀まで降りる乗客は少なく、ずっと満席状態が続いた。左を見ると緑鮮やかな比良山系が綺麗に映し出されていた。

車内の老いも若きもみんな青春18切符組に思え、最近では青春18切符を年配グループが使うことが多い。満席のまま敦賀に着くと横のホームには金沢行き普通電車が待っていたので、みんな座ることに必死、一目散で乗り込む。湖西線に乗っていた乗客のほとんどは敦賀では降りなかった。金沢行きは新快速と同じ新しいタイプの車両で快適だった。何せ長旅なのでトイレに行く乗客が多く、新車両の入口は自動開閉タイプのため、場違いな感じで困惑する人も多かった。トイレの前に立っていた登山ザックを持った若い女性はトイレの使用説明をする係りのような存在になっていたが、面倒くさがらずに笑顔で対応しており、頭が下がった。私が小学生の頃、鉄道では日本一長いトンネルだった「北陸トンネル」には敦賀を出るとすぐに入るが、今の高速化時代では長く感じない。

向かいに座っていたおっさん3人組も青春18切符で温泉と新潟競馬場に行くような話をしていたが、ひとりとは親分肌で何もせずに偉そうにしている。もうひとりとは必死で時刻表を見て、予定を検討している。さらにもうひとりとは宿泊場所をネットで調べ、あらゆるケースを想定した印刷資料から場所を検討していた。3者三様、それでバランスが取れているのだろうと想像する。

滋賀では青空だったのに福井駅に近づくると空はどんよりとした雲に覆われ、いつ雨が降り出してもおかしくない空模様になってきた。立山に行く時の定番は「ヨーロッパ軒・敦賀駅前店」にソースカツ丼弁当を電話で予約し、電車時間待ちの間に取りに行き、車内で食べていたが、今回は早く出たので福井駅近くの「ヨーロッパ軒・豊島分店」に立ち寄ってソースカツ丼を食べることに決めていた。10時47分に福井駅に着くので、そのひとつ前の駅で電話して、ソースカツ丼を予約する。開店は11時からなので、11時ちょうどくらいに店に行けるはず。福井駅では1時間の待ち時間があつたからだ。

ところが福井駅で降りようとする外は土砂降りに変わっていた。傘を差し、地図を見ながら進まないといけませんが、たまたまJRガード下はわずかに雨宿りできる場所が続いていた。そこを歩いて店の近くまで行ったが、そこから200mあまりでビショ濡れになってしまった。駅からは800mほどあった。11時に着くとすでに先客があり、テーブルに付くと予約しておいたソースカツ丼が出てきた。敦賀駅前店とはどう違うのか、味はほとんど変わらないようだが、若干ソースが濃いようにも思えた。敦賀駅前店の器は丼茶碗だが、豊島分店はソースかつ重といった感じで、ご飯の量は敦賀の2/3くらいと少な目だったので満腹感は少なかったものの、2年振りのソースかつ丼に満足だった。



駅に戻る時も雨は相変わらずで、シューズもバッグも頭もさらにビショ濡れになってしまった。福井11時45分の金沢行きに乗り、しばらくすると外は明るくなり始め、雨は止んでいた。雨は1時間あまり降っただけで、ちょうどその時に歩かなければならなかったとはあまりにも不運だった。もし電話をする前に強い雨が降っていたら、ソースカツ丼は断然したかもわからない。空はどんどん回復し、日差しも強くなってきた。

金沢で富山行きに乗り換えると電車は一気にローカル化し、古い電車に変わった。ここでごっつくと偶然遭遇し、一緒に富山に行くことになる。熊本から遠征のごっつくんは早い時間に小松空港に着くので金沢で時間を潰していたのだろう。昨夜はトラブルで徹夜し、ほとんど寝ていないとのことだった。金沢駅構内放送では特急が富山の豪雨で遅れているとの連絡があり、立山の状況が気になった。

金沢駅前後では北陸新幹線の高架工事が北陸本線に並行して行われていた。1年前は見なかった光景で、GWのさくら道の帰りでも気付かなかったのが、急ピッチの突貫工事なのか。敦賀付近からの区間はまだ決まっていないと新聞に書かれていたが、こちらではこんなにも進んでいるのだ。富山駅



が近づくに従い、また北陸新幹線の高架工事が進んでいた。駅と駅間の区間は北陸本線から外れるので工事が進んでいても見えないのかもしれない。

富山駅には14時37分に到着。横の地鉄ホテルに行くとまだ15時前で受付は始まっていなかったで、始まるのを待つ。参加賞はいつも通りノースフェイス製、今年は円状の日差しがある大きなキャップで後頭部にも日除けが付いていた。参加者名簿を見ると初参加の☆マークが目立ち、初参加者はマラニックで31%、ウォークで49%という数字になっていた。その中には巨人軍団のN野さんの名もあり、受付で顔を合わすと「会った覚えはあるんだが、名前はわからない」と言われた。N野さんとの会話は甲州夢街道やさくら道でも少ししているが、名前は全く覚えてもらっていない。気にもならないが……。私も峰倶楽部に名前があるが、雲峰さんのHPで見たレーシング・ザ・プラネット日本事務局のK藤さなえさんの名前もウォークにあった。

ごっつくと別れて宿泊する「桜橋ビジネスホテル」に向かうが、若干わかりにくかった。まだ時間があるので距離積み上げのために市内を走ることにした。富山市内、雨の後だったせいか蒸し暑さが強烈で4kmくらいでバテ始めていたが、距離を稼ぎたく目算の周回で走った。もうそろそろホテル付近かと思ったが、場所が違い富山駅からかなり離れていたようで、苦労してやっとの思いでホテルに戻れた。途中で2箇所スーパーに入って水道を使わせてもらったが、富山の水は冷蔵庫に入った水のように冷たかった。

北アルプスの水が一般家庭でも使えるなんて羨ましい。

うずらさんが到着後、もりけんさん、F井さん、N谷さん、babiさんの6人で「笑笑」にて前日食事会をする。知った者同士なので気楽に和気あいあいと楽しませてもらった。コンビニに寄って、ホテルに戻ったのは20時半頃だっただろうか。ブログを書いて、荷物をガサガサしてから寝るが、なかなか眠れない。その内、居眠り状態でテレビを見ていたら23時頃になっていたことだけは覚えている。

当日朝

予定より早い1時半に起き、2時前にひとりでホテルを出る。2時間半の睡眠では頭は起きておらず、ボォ～としたままだ。朝食は用意していなかったのが吉野家で牛丼弁当を買って、マラニックを見送った後、立山駅に向かうバス車中で食べようと思う。6時半スタートなので、この時間では早過ぎる。2時過ぎ、あまりにも早く着き過ぎたのでバスが来るのを待つしかなかった。真っ暗な中、まだ誰ひとりとしてバス乗り場に来ない。駅前の1車線を使って遊ぶ若者のボードが滑る大きな音だけが夜中の道路に響いていた。2時50分頃だろうか、やっとバスが来た。私はバスの時間を間違っていたようだ。

約30分掛かって、「浜黒崎キャンプ場」に到着。ここ浜黒崎だけはスタート前の熱気に包まれていた。ウォークの私はまだまだ時間があるので気楽に見送れば良い。昨日もらった参加賞のキャップを被っている人も多数いた。マラニックの部スタート前、半分寝ている状態だったことから、暗闇の中で溝に溝蓋が被ってあるものと思っていたら、溝蓋のない部分に足を置いてしまい、踏み外してしまう。一瞬ヒヤーとしたが、よく見ると膝横の擦り傷だけで済んで助かった。



マラニックの部を見送った後、4時半頃に立山駅行きのバスが出発。ウォーク参加者の姿は車内には少なかった。「芦崎寺雄山神社前立社壇」のエイドに置く荷物を実行委員長の松原さん達と一緒にバスから降ろす。窓から降ろすのは結構重労働だ。そこからバスは一旦西に向かったが、その時に松原さんが稜線を指差しながら、左のノコギリのような三角が劔岳、真ん中が大日岳、右の台形のような山が立山だと教えて下さった。称名川の東側を一路立山駅に向かう。

芦崎寺を過ぎた「立山大橋」で右折し、マラニックのコースを通して立山駅前に向かう。駅前駐車場には朝早くから多くの車が駐車しており、「天気が良いので今日の室堂は人多そう」と松原さんが言われた。ここでもエイドに置く荷物をみんなでバスから降ろした。その時、富山地鉄の黄色い電車が立山駅に停まっていた。あとでうずらさんから聞いたことだが、これは京阪電車の払い下げ車両で昔のままの姿で地鉄に使われているようだ。

そして、立山駅前へ行くとウォーク参加者の顔、顔があった。時刻は5時半。スタートが30分延びたので、1時間も余裕があった。車内ではトイレをかなり我慢していたので、トイレに駆け込むと下痢状態で、またかという感じにな



った。結局、スタートまでに3回もトイレに駆け込んだが、綺麗なトイレなので良かった。ケーブルカーを待つ人の行列ができていて、列はどんどん長くなっていた。雲峰さん、クニさんの姿もあった。そんな時、松原さんの奥さんに声を掛けてもらう。



立山駅前には「龍王の水」という湧き水があったので、飲んでみる。標高が低いので常温だった。朝の日差しが鮮やかに周りの山々を照らし、後光が差しているような感じだった。スタート前に「昨日の大雨で八郎坂は滑りやすくなっています。ウォークですから、絶対に走ってはダメですよ」とスタッフからは説明を受ける。実行委員長・松原さんの「エイ、エイ、オー」の掛け声の元、6時30分にスタートする。

大会道中

去年はうずらさんと称名まで一緒に歩いたが、今年は知人がいないのでひとりで歩くことになった。ウォークとはいえ、昨年より速いタイムでゴールしたいという思いはあったが、景色の状況を見ながらの写真撮影も大事なので適当に遊ぼうとは思っていた。いきなり数人が速いペースで歩き始めたので付いていくのもかなり大変だった。称名川に架かる橋を渡り、下を見ると昨日までの雨で水嵩が多く、堰から落ちる水の流れも速いように思えた。



私の前を6人の集団が必死で歩く。みんな言葉もなく、ただただ前に進むのみといった感じだ。うちひとりの女性は登山靴で歩いていたが、こんなに早く歩いて体力が持つのだろうかと思った。昨年よりスタートが30分遅い分、天気が良いこともあって真正面から日が差し込み、かなり暑くなりそうで、八郎坂の上りでは暑さに苦戦しそうな予感がした。称名川の階段の如

く何段も見える堰から落ちる水の流れを見るのが好きで写真を撮りまくる。写真を撮る度に少し遅れるが、早く歩くとまた集団の少し後ろに付けた。

左には水力発電の水を高いところまで上げる管が見え、その横には「北陸電力・称名川発電所」があった。過去はただの発電所があったに過ぎなかったが、今年は原発事故のこともあって違った目線で見てしまう。真正面の称名滝付近からの強い日差しが眩しい。先



頭集団は道路の影を求めて、右に左に移動しながら進む。後ろにいるとお構いなしに2列、3列になって歩く集団の姿は後ろから走って来る車の邪魔になっているのが気になる。

ログハウスのレストラン「クムジュン」前を通過。右の遥か頭上に「立山有料道路」が見え始めた。立山有料道路入り口ゲートのある「桂台」は標高663m。ここにエイドがあり、ワインも用意されていたようだが、パスして横から湧き出ている冷水で顔を洗うだけに留めた。後続から3人ほどが追いついて





来た。ウォークながらし烈なサバイバル競争になっている。7時頃には直射日光を受けて汗だくになっていた。称名川の堰は高くなり、水量が多いだけに落ちる水は糸のようで、まるでた織り機のようにも見えた。落ちた水はコバルトブルーできれいだ。



朝の陽光に照らされた「悪城の壁」が見え始める。こんなにきれいな悪城の壁は初めてだ。緑鮮やかな中に高さ300m、幅2kmにわたる一枚岩を見るのも毎年の楽しみだ。前を歩くウォークの人は周りの景色を見ることなく、ただひたすらに一生懸命歩いていた。大自然いっぱいの立山をいっぱい楽しまいともったいないのに、どうしてただ前を向いて歩くだけ何だろうと思ってしまう。プレハブ小屋が見えた。そこには流し台のような台があり、冷水がホースで引かれているので、水分補給する。勝手知ったる身なので、どこに何があるかは頭に入っている。

「北陸電力・称名川第二発電所」が見えると間もなく洞門があり、そこは心臓破りの13%の上りだ。この手前から先頭グループはばらけ、同時に後続から2、3人が追いついて来た。登山靴で歩いていた女性



性はすでに脱落していた。前屈みになって必死で歩いているとマラニックトップの男性が走って上って行った。ペースはわからないが、先頭でも13%の坂はキロ7分くらいの走りしかできていないように思えた。

急坂を過ぎると称名川の駐車場案内が見え始める。この辺りでエアコンの冷氣ほどに感じる気持ち良いところがあった。山側から称名川に水が落ちている場所で、ここにじっとしていればどんなに気持ち良いだろうか。この頃になると前には5人くらいしかいなかった。間もなくスタッフからゼッケン番号が読み上げられ、いつも通りの「山猫



さん、頑張って下さい！」と大きな声が聞こえてきた。そして「称名エイド」(8.0km)には7時38分到着。500m上って来て、キロ8分30秒少し、かなり頑張って歩いたようだ。



冷えたタオルを小学生くらいのボランティアの女の子からもらって顔を拭く。生姜入りのそうめん、梨、パン、水を頂き、取り急いでエイドを出発。すぐ先にある冷たい湧き水で顔を洗い、ペットボトル

いっぱいに入水して、八郎坂を上る準備をする。



この時、すでに帽子の日差しからは汗がボトボトと落ち続けており、八郎坂ではさらにダメージにならないで済むかと心配になる。ここから称名滝方面への上りもかなり厳しい。「大日岳登山口」の表示があった。称名川の川幅いっぱいに入水して落ちる水は相変わらず糸を垂らしたようで何と鮮やかなことか。奥まったところにある称名滝は見えないが、真正面には雨量が多かった時にだけ現れる落差500mの「ハンノキ滝」が現れ、糸のように細い水が落下していた。大会が途中で中止になった2009年の大雨時も現れていたが、あの時はもっと多量の水が落ちていた。これくらいが一番きれいだった。ただ、称名滝の上に太陽があり、逆光で見辛い。

ここで右に折れて称名川に掛かる「飛竜橋」を渡って、「八郎坂」と刻まれた石碑から八郎坂を上ることになる。底の減った4000kmは走ったと思われるシューズなので、昨日までの雨で滑り易くなった登山道を如何に克服するかが一番の課題だった。その上、凄い湿度ですぐに半パンも汗まみれとなり、シューズまでずぶ濡れになるまで時間は掛からなかった。7時51分に上り始める。



ここから弘法までは2.4kmで500m上っている一番の難所でもある。滑らないことを第一に慎重に慎重に上って行く。既に八郎坂を上っていたウォーカーを何人か抜かした。後続のマラニックランナーが後ろに来れば道を空けた。最初の称名滝が見えるポイントで写真を撮ろうにも腕全体から流れる汗で、

カメラさえ持つことができない。帽子の日差しからは汗がポトポト落ちるので、帽子を振って汗を飛ばした。八郎坂ではこれの繰り返しだった。シューズ内に汗が流れ込み、シューズのグリップ力が減って滑りやすくなっているので安全第一に務め、神経をかなり使った。落ちたら、イチコロだ。

後からマラニックランナーがいつ上って来るかわからないので、いつでも開けられるように後にも気づかいながら進む。私より前にいたウォーカーを数人抜かしたが、前半の勢いある歩きは影を潜めていた。時計を見なかったので半分くらい来られたか、と思っていると距離表示板があり、まだ0.7kmしか上っていないかった。辛い時はこの表示が更に苦しくさせる。

上り始めて20分経過した頃に称名滝が真正面から見られる最初のポイントがある。標高1270mの展望台だ。ここまで来るとV字谷からきれいに落ちる日本一の称名滝の様子がはっきりと見える。少し逆光で撮影ポイントが難しい。



例年に比べて石が濡れており、黄緑色のコケが付いているところも多かったように思えた。足で上がらず、手で岩をしっかり握り締めて、上るように心掛ける。半分の30分余り経過した頃、再び称名滝がはっきりと見えた。2ヶ所目の1410mの展望台は木立の間から称名滝が見られる場所だ。称名川に掛かる多くの堰と同じように、細い糸の集まりのようにも見える。八郎坂からだとも距離があるので、小さく見えるが、滝壺の下に行くと凄い水量だろう。



後からやってくるマラニックランナーに道を譲ったは良いが、私とペースが変わりなく、逆に邪魔になる人もいた。前にいる女性ウォーカーは岩を手にする事なく、足だけで上って行っているが、足だけの人を見ると危険な感じに思えた。特に八郎坂は上に行くほど岩が大きくなり、身体を使わないと上りにくい。何回か土の登山道があるが、道幅が狭く、草も覆い茂っているので油断できないところだ。この辺りで木の大きな杖の棒を持った若者ウォーカーに抜かされる。富士山などに登る時に杖代わりにする棒だ。

表示板を見る毎に全長2.4kmに対し、残り距離が少なくなるので安堵する。とりあえず汗を拭きまくり、帽子の汗を振り飛ばしているうちにスタッフの姿が見えた。「水はどうですか？」と言われたが、ペットボトルにあったのでパスした。この先にもスタッフがいて下さった。例年と同じだ。もう少し行くと急な上りがあり、そこを過ぎると岩場が終わり、立山有料道路を走るバスの音が聞こえてくる。平坦な土の登山道を少し行くと3段ほどの階段の向こうに立山有料道路が見え、難所・八郎坂は制覇できた。これで、ひとつの心配事はクリアできた。



スタッフが3人ほどいて下さって、「木道は壊れているので通らないで、道路の左端を通って下さい。エイドは500m先です」と指示してもらった。確かに木道はかなりひどい状態だった。右側のいつもの場所に「弘法」エイドはある。梨とパン、ゼリー、水分を頂く。抹茶を立てられているスタッフもいた。去年はここでM本さんと会えたことを思い出す。

その頃、マラニック5、6番手くらいのランナーが到着。鉢巻きをして気合いの入った様子だった。そのランナーのシューズは底がフラットでシリアスランナー用のマラソンソール、底も減っており、かなり滑り易そうだった。このシューズで八郎坂を上がって来たのかと思うと安全という面では私のシューズの方がマシかなと思えた。

ここから追分までは木道となる。過去の大会ではほとんど荒れていなかったのも木道はすんなり進めたが、今年はいきなり滑りそうで、木道の両側の笹も全く刈り取られておらず、素足が笹の葉に擦れて気持ち悪い。進んで行くうちに更にひどくなる一方だった。笹が邪魔して木道が見えないのも不安になる。そして、肝心の木道もずれていたり、外れていたりして整備が全くされていない状態だ。今まではこのような

ことはなかった。

木道は一般登山客も利用するのに、どうして何だろうという疑問を感じる。管理する側に時間がなかったのか、これからやるのか、そこはわからない。それでも前に進まなければならない。下りがあれば、歩きにくいので走った。先ほど追い抜いて行った杖を持った若者が前に見えるが写真を撮る度に距離は広がって行く。何回か立山有料道路脇に出るが、また木道に戻っ



て行く形で進む。途中からは笹の葉ではなく、いろいろな草とか、木とか、それらが完全に木道を塞ぎ、危険をも感じた。木道が終わる頃には覆っている草木が少し空くようにはなっていた。



木道最後のところはT字型の木道になっており、スタッフが方向を示す看板を木道の上に置いていたら、前からやって来た長身の登山者がその看板を蹴って、脇に落とした。登山者は木道上で大会を行っていることが気に食わなかったので看板を蹴ったとすぐに思えた。登山者らしくないマナーだ。同時にそこで私と接触しそうになったが、間一髪免れた。接触していたら、木道から突き落とされたかもしれない。



ここでようやく木道が終わり、立山有料道路に出られた。この先には料金所ゲートがあり、どのバスも一旦停止していた。そこからSの字になっていてそこを上ったところに弥陀ヶ原エイドがある。去年はこのカーブで走っていたのを思い出す。アスファルトの道路に出て、風が気持ち良く、汗も引いたようだ。

弥陀ヶ原エイドに到着する前、ここでもゼッケンを読み上げられるとしっかり名前を呼んでもらえた。

ここのエイドの名物はキュウリでマヨネーズは付けずに塩を掛けて食べ、パンも頂いた。マヨネーズは嫌いなので普段から食べない。塩を掛けたのは塩分補給のためだ。



「水を補給しましょうか」と言われたが、「この先のバス停の水道からは冷たい水が出るので、そこで補給します」と丁重にお断りする。ウォークでは4番目とか言われた。

標高1930mの「弥陀ヶ原ホテル」前にある弥陀ヶ原バス停の待合所には9時33分に到着。ここは立山有料道路では唯一のオアシスでもある。ペットボトルに水をいっぱい補給し、頭から冷水を被り、顔を洗う。過去、私がこの中に入っている時、誰も入らずにそのまま通り過ぎて行った。非常にもったいないことだと思う。上り側と下り

側、共にバス待ちの人が10人以上いた。中には声を掛けてくれる人もいた。

待合所に入っている間に後にいた女性ウォーカーに抜かれた。この女性は一生懸命歩かれていて、全然私とは違うなあ～と思っていた。こちらは写真を撮らないといけないので、撮っては歩き、撮っては歩きを繰り返す。何回も参加していると写真を撮るポイントとアングルが概ね決まっていて、毎年その学習をしているように思える。左前方の大日岳、奥大日岳はガスが掛かっており、すっきり見えない。一面に広がる草原や道端の花、草を見渡ししながら前進する。



弥陀ヶ原から室堂までの7.8 kmは蛇行した坂が延々と続くが、目の前に刻々と変わるパノラマが現れない分、変化がなく精神的に辛い区間でもある。この間で520m上っていることも辛さを増しているのだろう。前にいた男性が失速したので抜かす。一時的に先行された女性もすでに抜かしていたので、ここで3番目になったようだ。

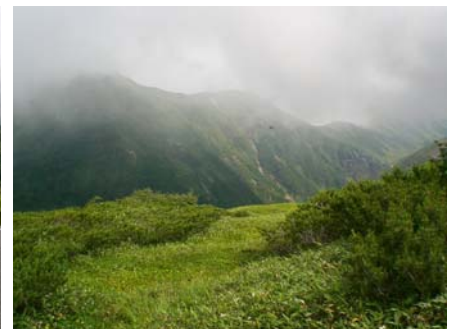


2030mの「美松坂」を通過。下を見ると蛇行している立山有料道路の様子がよく見え、頑張って走っているランナーの姿も映る。こうやって上から見ると改めてきついコースだとわかる。大きなカーブのところで道路工事が行われていた。片側通行でゆっくり行けなかったのも、この間だけは走った。道路上にはガスは掛かっていないが、左側の大日岳、奥大日岳は相変わらずガスの中で一向に全容が見え



ない。

弥陀ヶ原から50分経過した頃、2230mの「鏡石」は見上げたところに石がある。鏡石は昔から鏡のように何かが映ったことから、鏡石と名付けられたと聞く。眼下の写真を撮ると力強く上っているランナーの姿があった。あとでよく見るとがつつくんだ。その頃、



女性ウォーカーはペースを上げたので、写真を撮っている間に抜かれ、差はどんどん広がっていった。そして、徐々にガスも切れ始めていた。2270mには「ソーマン滝展望台」があり、きれいにソーマンのように滝が落ち、その奥には硫黄の煙が上がっていた。滝の回りには緑がないが、これは硫化

水素のせいだろう。この先に称名滝があり、横を通って来た称名川がある。

ここでがつつくに追い抜かれる。身体が傾き加減で真っ直ぐに走りにくそうだった。しかし、さすがサブ3のネイチャーランナー



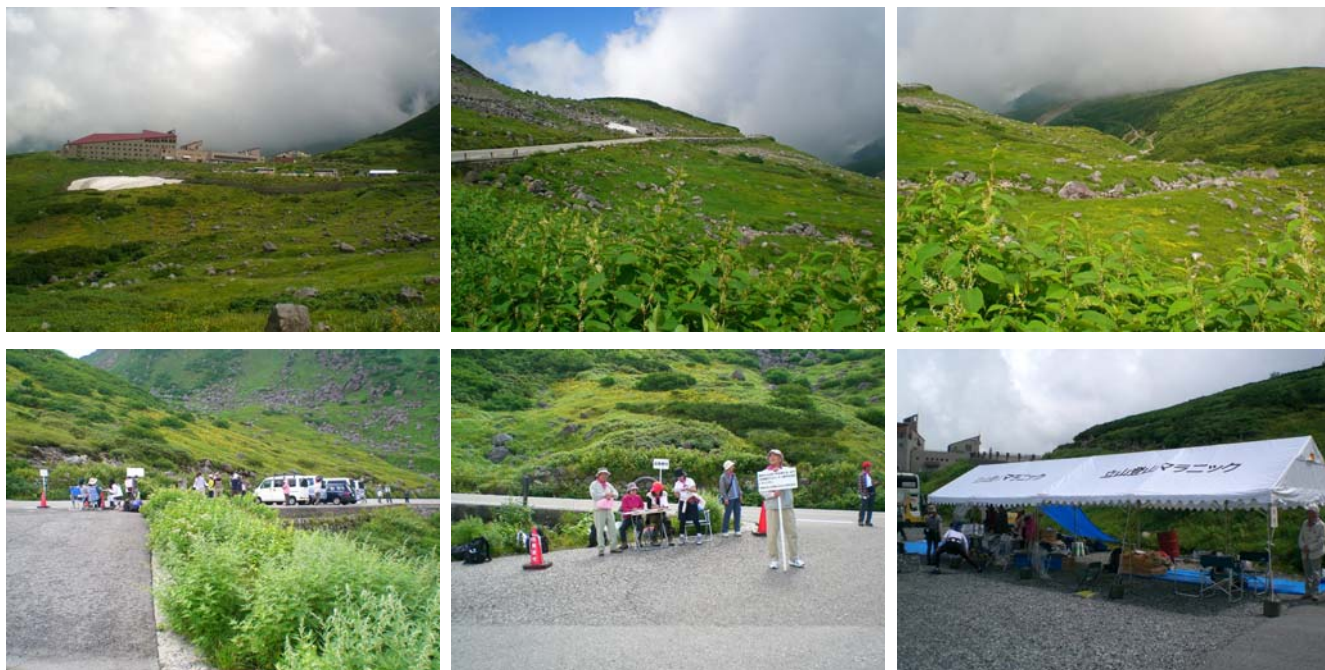
である。すぐ先に「立山高原ホテル」が見え、右には「天狗平荘」もすぐそこに見える。やっとの思いで2300mの「天狗平」にやって来られた。弥陀ヶ原からの5.7kmは1時間2分掛かり、これは昨年と全く同じ時間だった。天狗平に着くと一番長く辛い区間が終わってホッとするのは毎回のことだ。その先には広い待避所みたいなところがあり、そこに置いてあった除雪車にはチェーンが巻いてあった。



掛かったり、少し消えたりするガスだが、この時間帯から徐々に消えつつあった。右側の緑色の山には大きな岩が一面に点在している。真正面に「ホテル立山」が見え、その手前のくぼ地には雪溜まりが見える。道端にも岩の上に小さな雪渓があった。2390m「大谷」の表示が見え、GWには10m以上におよぶ雪の壁となるあの「雪の大谷」だ。しかし、夏だと何も感じない。

いつもは短く感じる天狗平から室堂までだが、今年は長く感じた。暑くも感じた。前には室堂エイドのテントも見え、多くのスタッフの姿も見えている。エイドの手前ではスタッフが等間隔で並んで、「山猫

さん、お疲れ様。エイドですよ」と名前を呼びながら迎えてもらえるのは毎回のことで、かつてマラニックを走っていた私からするとウォークだどうしても恥ずかしさが出てしまう。多くのスタッフにお礼を言いながら、エイドに入る。



「室堂エイド」到着は11時ジャストだった。いつも通り、梅干し抜きのおやゆっこ、パン、水を頂き、ペットボトルいっぱいに入水を入れて頂く。2分弱くらいでエイドを後にして、一の越を目指す。立山湧水の水には人盛りができていた。多くの登山客や観光客が歩く石畳を進む。昨年はこの辺りから足が動かなかったが、今年は結構動いているように思えた。目指す雄山には少しガスが掛かっている、立山連峰全体はかなりガスっていた。

室堂平からアップダウンのあるくねくねした登山道に入ると一気に人が減った。360度のパノラマは鮮やかで異次元の世界にいるみたいだ。もっと手前にあったように思っていた雪渓が見えず、今年は雪渓が溶けているの



かと思っていたら、青空の下に雪渓が現れた。雪渓がそんな簡単に溶けるはずがないのに、勘違いしていたようだ。ただ、例年に比べて登山道上の雪渓は短くなっていて助かった。底がツルツルのシューズなので滑らないか気になったが、何とか抜けることができた。



青空に緑の草木、白い雪渓、高い山々、このままずっと眺めたい気分になる。石が積まれた賽銭箱のある「外岳神社」を少し過ぎた辺りまでは順調に上って来られた。頭上に一の越荘が見えてくるとコンクリートに石を埋め込んだ登山道の上りは急になり、思うように前に足が動いてくれない。

この辺りから上る人、下る人の数が一気に増え始めた。かなり息切れ状態となり、休んでは進みを繰り返す。それでも明らかに昨年よりは楽に上れている。一の越までの上りは息苦しいので、どちらかというとなを下を向いて上って行くことになる。

頭を上げると目の前に2700mの「一の越」が見えた。11時38分到着で、何と室堂から38分で



来られたのだ。自分でも驚く。水とチョコレートを頂く。昨年はW井さんに付き合っテ缶ビールを買ったが、今年はパスする。トイレだけ行っテ一氣に上り始める。昨年はストックを持っテ上ったが、上りには便利でも、下りでは邪魔になり、危険でもあるので今回はパスした。手が自由に使える方が楽で安全だと思ったからだ。

ここから標高で300m上らないといけないうが、慣れたもの、今回で6回目の雄山山頂を目指すことになる。一昨年は大雨で中止になり、雄山には上ってない。その代わりに剣御前小舎まで上ったが、真っ直ぐに上らなければならず、雄山よりはるかにきつかった。2ノ3くらい上がったところにやや平坦な二



の越があるので、そこまではできる限り休まずに頑張っテ上ろうと決意する。上りは昨年と比べて子供が少なく、今年の登山者は大会に協力的で大会参加者が上って来ると「ランナーが来ますので、前を開けて上げて下さい」という声が何度も聞こえた。お陰でイライラすることなく、スムーズに上れ、そうになると逆に発憤してしまうものだ。実際は腰を降ろして途中休むこともできず、我慢の上りでもあった。

「この先で滑落によるケガ人が出た」という声が聞こえてきた。どこで事故があったのか気になる。シューズが減っテいるだけにしっかりと足裏に力を加え、岩や地面グリップ力をアップするように心掛ける。二の越より手前だと思うが、通り道には滑落された年輩の男性が横になられていた。山岳警備隊を待たれているのだろう。どんな状況かはわからないが、身が引き締まる思いで上を目指す。

「二の越」まで来ると眺めも最高なので、どうしても腰を降ろしてひと休みしたくなる。例年よりも今年はガスっている感じがする。真正面のギザギザの山の周りには幾つもの雪渓が見える。ずっと前を開けてもらえたので、人の多い割に上りやすかった。ゼッケンを見られた後にいた中年女性から「マラニックって、どういうものですか？」と尋ねられた。「マラソンとピクニックを掛け合わせた名前で、一生懸命走るのではなく、ピクニック的な楽しみも入れた大会のことです」と答えたら、「やっぱりそうですか」と返事された。

二の越と山頂の間くらいで、山



頂が近づいた頃に鏡石付近で抜かれた女性ウォーカーが「ハア、ハア、ゼィ、ゼィ」言いながら、それでも休まずに上り続けていた。思わず「過呼吸ではありませんか。無理しないように上って下さい」と言っテも、全然聞く耳を持たず、それでも必死の形相で絶対に休まないという感じで上っていた。周りの人も関係なく、自分の道という感じで上って行く姿に腹が立ち、回り道して抜かして行く。

そして、間もなく山頂の休憩所が見えると「もしかして、ウォーク1位だったらどうしよう？」と思っテたが、山頂手前で2位と聞き、胸

をなで下ろす。それは表彰があるのと、過去マラニックに参加していたので来年はマラニックに出よと言われるのが嫌だったから。ゼッケンが読み上げられ、人盛りの休憩所前を通り、12時13分にゴールテープが切れた。昨年の6時間より速い5時間43分で、室堂からは過去では一番速い73分、一の越からは35分で上れたことになる。一の越からは天候も涼しく、登山者に道を開けてもらえたことなど条件が



良かったこともあるだろう。

次のオプションのことを考えて、すぐに雄山神社本宮でご祈禱をして頂くために順番待ちする。まだ早い時間帯なので一般登山客も多く、2回ほど入替待ちがあった。そして、3003mの「雄山神社本宮拝殿前」で宮司さんにご祈禱をして頂く。毎度のことながら、山頂でもあり、いろいろな人がいるのでざっとしたご祈禱ではあるが、宮司さんのその祝詞（のりと）の中で「老いも若きも坂をよじ登り・・・」という一節があり、笑いが起こった。過去には聞いたことのない一節で、通り一辺倒ではなく、こういう表現のご祈禱があっても良いのではないかと思えた。

雄山山頂～龍王岳～雷鳥荘



一旦、ゴール地点でコーヒーを頂き、一の越に下山後は真向かいの龍王岳から浄土山、室堂山から室堂へと思いついた地図も持って来たが、コースが全くわからないし、危険かもしれないし、ひとりですり減ったランニングシューズを履いて行って大丈夫か、頂上の大会ボランティアの女性に聞いてみた。頂上でスタッフされている方は女性でもみんな登山経験のある人ばかりで、この周辺はご存じだと思ったから。ひとりの女性スタッフが「浄土山から室堂山は大きな岩がゴロゴロしている中を急な下りがあるので、ランニングシューズでは危険で滑落の可能性もある。登山者も少なく危険過ぎる」と教えてもらった。龍王岳往復なら、ランニングシューズでも全然問題ないと聞き、安全第一の龍王岳往復が今年のマイオプションとなった。聞いていなかったら危険を省みない私のこと、行ってしまったかもしれない。

ウォーク1位と思われる若い男性はご祈禱してもらえんことを知らずに休憩所前に座っていたので「ご祈禱料金も大会参加費に含まれている」と言って、雄山を後にした。山頂にいたのは40分くらいだ。下



りはケガ人が出たこともあり、また子供も多くいたので、みんな慎重だった。いつもなら、我れ先にみたいな感じで下りる人もいるのだが、今回は1列になって安全にここを下るのだ、みたいな感じの下りになり、みんなそれに洗脳されたような下りに思えた。下を見ると二の越までの全体がはっきりと見え、これだけだと大したことないみたいに思えるが、実際はそんなことはない。下りは滑り易いので大変だ。室堂からのコースを上から眺めると今年の雪渓はやはり小さいようだ。



二の越まで下りた後は前が詰まって人も多くなり、完全な1列状態で前に進めなくなった。中間地点辺りだろうか、ケガされた方の横には雄山神社のハッピーを着た若者が様子を見ていた。救急箱が置いてあり、ケガ人は酸素マスクをして、山岳警備隊を待たれていた。少し下ったところで山岳警備隊数人とすれ違い、もう少し下るとケガ人を背負った山岳警備隊員が「ケガ人を下ろしますので、前を開けて下さい」と言いながら、背負い搬送で下山して行った。これがテレビでも見たこともある日本一の富山県山岳警備隊の生の姿で、室堂派出所に向かうのだろう。ケガ人は酸素マスクを外していたが、ヘルメットを着用、目もしっかり開けられていて元気そうだった。

酸素マスクは標高が高いので安全のために付けられていたのではないかな。小さな子供でも登山する雄山だが、どんなに気を付けていてもひとつ間違えば山は魔物だという証明だろう。7回目にして、初めてケガ人を見たが、他人事ではない。雄山のような広いところでも、下手すれば足を滑らせても何百m下に滑落するとも限らない。天候が急変すれば、とんでもないことになる。ケガ人が背負われて行く様子を見てから、下山者の足の出が更に重くなり、この時はみんな慎重で、特に滑り易いランニングシューズを履いたランナーはより慎重に下山する姿が目についた。

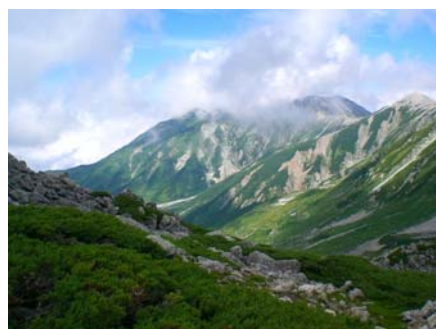
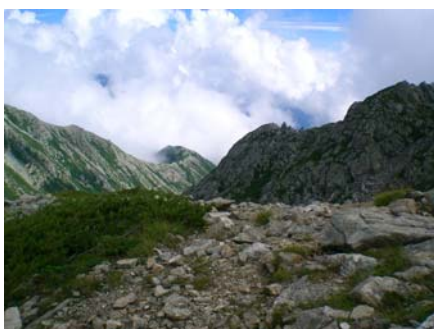


1列状態なので前が止まる毎に進めなくなり、そんなことの繰り返しの中で、約1時間掛かって一の越に到着。先ず、下山できた褒美に「一の越荘」で450円の350ml缶ビールを購入し、アテにスタッフからチョコレートを頂く。ここからはマイオプシオン、



一の越荘と室堂平側の間を通過して龍王岳に上ることにする。少し上ると岩の門みたいなものがあり、離れて見ているとどこから乗り越えるのかと思えたのだが、真ん中を進めばすんなり岩を上って行けるようになっていた。

その先は見た目、それほどでもないが、実際はかなり苦しく、山の傾斜に目が錯覚してしまう。左前方にはギザギザの山があり、雪渓も見える。後を振り返って、今下って来た雄山を見るとそこは緩やかな尾根で、ここを上って下ったのかと振り返ると全然イメージが違ってくる。雄山側は人でいっぱいなのに、こちらではすれ違う登山者は極わずか、雄山との落差を感じ、その分寂しさも漂ってくる。



しかし、見る方では草木がいっぱい見られ、這松やイワツメクサなども生えていた。這松は地面いっぱいに広がって生えており、見事だ。さらに上るとチングルマや青が鮮やかなイワギキョウも見られた。上

り始めて30分で山頂に到着。木を組んだ跡があり、行き先を示す柱も立っているが、どこが山頂を表しているのかわからない。ここから浄土山に行けるのだろう。



山頂では食事中的人もいた。雄山と違って閑散としているが、こういう雰囲気の方が山らしくて良い。ここからはまた元に戻るだけだ。結構、土の上に岩や石ころがゴロゴロしているので下りは滑りやすくなっていた。この辺りから見る雄山というか、立山連峰は全く違う山のように見える。山は見る位置が変わるとコロッと全容を変えてしまう。地面に生えている草木を見ながら、上りと同じように下って行く。



そんな時、太陽光を受けて輝いている這松の脇にいる「雷鳥」を発見。草を食べていた。立山には7回来ているが、生まれて初めての自ら雷鳥を発見できたことは感動の渦だった。しかし、尻を向けた状態で、こちらを一度も向いてくれないままで近寄ると這松の中に入って行った。顔をしっかりと見られなかったことは残念だが、龍王岳に上って良かったと嬉しい気分下山する。先ほど同様に雄山の上下りする人々の姿はまさに点にしか見えなかった。そして、一の越へ。



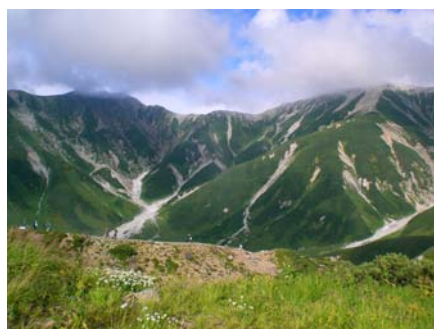
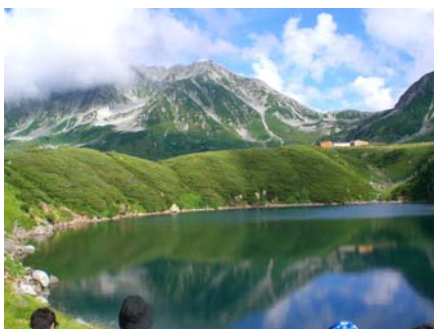
龍王岳往復で出会ったのは10数人だけだった。

14時50分頃には一の越にいたスタッフはみんな退散していた。ここからはいつも通りのコースを戻ることになる。下り始めた時、子供を含めた家族連れが何組か下山し始めたところで、下がコンクリートとはいえ幼い子供の下山する姿は危なっかしくて見ていられない。接触すると子供が転倒する可能性があるのを気を配りながら下りて行く。急な下りが終わればひと安心、ひと息つく。

この時間にしては人が少ないように思う。減ったシューズ底での雪渓通過が心配だったが、腰を降ろし、ソリに乗ったような格好になって滑るとすんなり通過できた。雪渓の長さが短くて助かった。室堂平まで来るとさすがに人の数が一気に増える。一服がてらに散歩している人も多いからだろう。

室堂エイドに戻り、バッグをもらおう。ここで雷鳥荘までのスタミナ温存のために残り物のパンをもらうが少し硬くなっていた。室堂バスターミナルの中を抜けると「立山湧水の水」があり、前には人で溢れていた。私も持参のペットボトルに冷たい湧水を入れる。自然の冷蔵庫だ。ここから見る一の越、雄山は青空の中にあり、鮮やかだった。

「みくりが池」は素晴らしい光沢の輝きを漂わせ、目の前の山崎カールも鮮やかだ。晴れ渡っていて天候が良いので、その内、重い荷物を持つての急なアップダウンの繰り返しは辛く汗ばんでくる。雲の中か



らは「劔岳」が少しだけ顔を出していた。反対側の地獄谷からの白煙はいつになく量が多いように思えた。「劔御前小舎」の下面の緑は鮮やかで、みくりが池側の斜面の草は茶色に紅葉し始めていた。雷鳥荘の手前でかなり強烈な硫黄の臭いがし、咳き込んだ。地獄谷から出ている硫化水素の煙が雷鳥荘の方に流れて来ていたためだ。それにしても、いつもより地獄谷の煙は多量で地底で何かあったのだろうか。



雷鳥荘にて

16時15分、やっとの思いで宿の「雷鳥荘」に到着する。部屋の確認をするとF井さん、もりけんさん、がつつくんの4人部屋で希望していた通りとなった。部屋は2段ベッドと畳の部屋で案外広くて良かった。がつつくんはすでに部屋に入っていた。ウォークながら、太股と脹ら脛辺りは少し筋肉痛気味だ。

汗を落とすために温泉に行くとタイミングが悪く、洗い場はいっぱいで順番待ち。硫黄泉の展望風呂に入った後、汚れを落とそうとしても洗い場が開かず、窓は全て閉め切っていたので熱が籠もり、汗がどんどん吹き出す。やっとの思いで洗い場が開いたが、シャワーはなく、水道も冷水がチョロチョロで使い物にならない。混んでいるのに周りには関係ないとばかりに知らん顔して、なかなか場所を譲ろうとしない人もいて、気配りできないものかと腹が立った。シャワーは開かなかったが、別の水道が開いたので強烈に冷たい水を何回も被って風呂を上げる。やっぱり冷水は最高だ。

まだ雷鳥荘に着いていない仲間が多かったので、夕食は18時40分からにする。その間は外の空気を思い切り吸いながら山を満喫する。17時過ぎになると少し肌寒くなっていた。

18時40分からはみんなで夕食。N部さんも入られ、8人で乾杯だ。前はもっとゆったり感があったが、ここ3年ほど前からスタッフが一変したようで座る場所をうるさく言われるようになった。生ビールも瓶ビールも700円だったので、みんな瓶ビールを注文。夕食の内容も以前の方が良かったように思う。マスの刺身は美味しいが、ハンバーグのソースは全然美味しくなかった。それでも楽しく雑談しながら、食事を楽しむ。

8時から恒例の懇親会。開場前に並んでいると男性から声を掛けられたが、誰か思い出せない。富山・城端のK田さんだった。ほとんど練習していないと言いながら、マラニックを完走された様子。2002年、やどやんをゴールに導かれたのはK田さんだったこともあり、「やどやんはどうされていますか？」と尋ねられ、「膝の手術をされ、今はほとんど走られていないようです。その代わりに、ミュージシャンになられています」と答える。また、会いたいと言われていた。

関西の仲間と合流後は椅子の数が参加者より圧倒的に少ないので、座れずに立食で飲んで食べる。場所が狭く窮屈だったので、結構疲れた。ビールを飲み、清酒「立山」の冷酒を飲んで談笑する。マラニック、



ウォークの各男女トップゴール者の表彰を見て、ウォーク2番目で良かったと思った。過呼吸の女性ウォーカーは女子1位で表彰されていた。その内、立っているのが疲れたのと前日の睡眠不足で酒の回りが早く、9時半頃には部屋に戻った。

今回はベッドで寝ることになったが、上段にF井さん、私は下段で寝た。トイレに行く時は囲いが高過ぎて足がベッドから出せずに苦勞する。別室だったN谷さんが狭いからと我々の部屋に移動したが、気心が知れた仲間なので歓迎だった。N谷さん、もりけんさん、がつつくんはずっと飲んでいて、12時前くらいに戻って来たようだ。

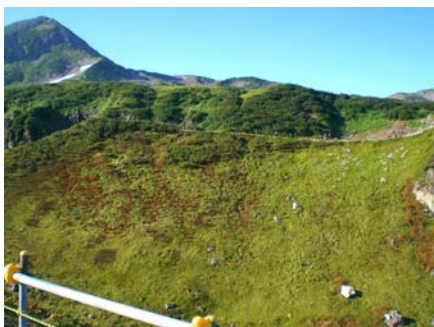
翌朝の雷鳥荘～室堂

翌朝は4時半に起きて。温泉に入ろうと思ったが、何せ昨日の浴室の熱さが気になって、風呂に入る気がなくなっていたので、もう少し寝る。5時に起きて、自分にとってわずかに肌寒い程度の山の空気をいっぱい吸って、立山連峰や劔御前を眺める。まだ日差しがない分、雲は白く濁っていた。立山連峰には横縞模様の変な感じの雲が浮かんでいた。今までに見たこ



ともない、孫悟空が上に乗るような感じの何とも表現しがたい雲だった。

6時になれば朝食。とりあえず腹が減ったので、思いっきりバイキングを食べる。夕食より好きな物をいっぱい食べられる朝食の方が良い。7時過ぎには雷鳥荘を出発することにし、残り時間は窓越しに地獄谷を眺めながら、ホットコーヒーを飲む。セルフだが、100円と安いので有り難い。



7時過ぎにみんなで雷鳥荘を出発。晴れ渡った青い空に緑が鮮やかだ。360度どこを見ても澄み渡った青い空、絵に書いたような景色に帰るのがもったいない気持ちになる。激しいアップダウンの尾根をバスターミナルに向かうのもこれで7回目。年々厳しい帰り道になっているが、それでもこの楽園を離れるのは名残惜しく、貴重な時間でもある。



ちょうどみくりが池から少し上ったところで人盛りが出来ていた。雷鳥がいたのだ。今度は2匹の雷鳥を見ることができた。横や後姿は見られるのだが、顔をこちらになかなか向けてくれなかった。何れにしても立山7回目にして2回も雷鳥を見ることが出来たのはラッキーこの上なかったが、自分で発見した昨日の方が感激だった。



観光客や大きなザックを背負っている登山客とすれ違いながら、ようやく室堂バスターミナルに到着。その手前で後ろを振り向くと劔岳が半分顔を出していた。ギザギザで他を圧倒する岩の塊は威風堂々として、思わず足が止まってしまう。



まだバスは来ていなかったの、荷物を置いて土産物買いに行く。天気が良いので、早朝からバスターミナルは人で溢れていた。土産物コーナーには昨年まではなかった「ノースフェイス」のブースが店内に出来ていた。さすがに登山関係は何でも高い。バスはなかなか来ず、やきもきしていると9時前にバスがようやく到着。

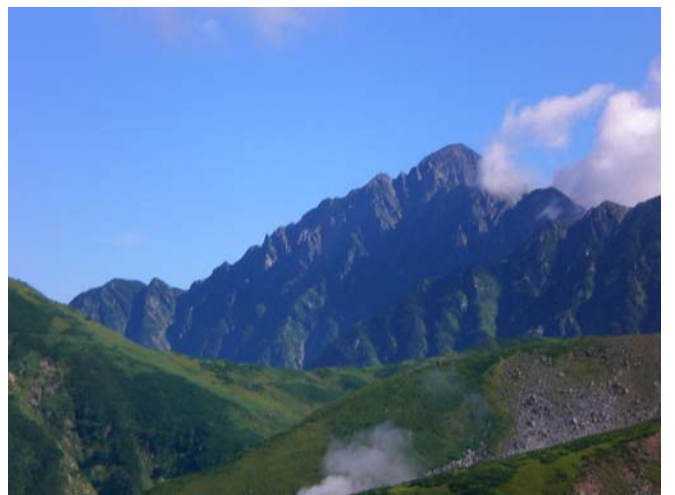
「来年も逢いましょう！」というスタッフの元気なお見送りを受けて、下界へ出発。いつものことながら、室堂を去る時は朝早いので名残惜しい気持ちになる。

室堂からの帰路

バスの隣席にはニコンの一眼レフを持った男性が座り、バスが走り出してからシャッターを何度も切られていた。バスが走り出して5分経ったソーメン滝付近で見事な「劔岳」を見られ、場所を譲ってもらい、窓越しに劔岳の写真を撮ることができた。このランナーは印象が強く、初めて参加した時に頭には日の丸が書かれた？ような長い鉢巻きをし、タイツは赤と黒のCWXで「元気なおっさんだなぁ～」という印象が鮮烈に残っていた。2回目の参加の時もどこかで前後していたことも記憶にある。

この方は兵庫のO本さんで、私より1年早い2003年から参加され、ずっと完走され続けられている。2003年当時は富山で仕事していたが、今は定年退職して兵庫に住んでいるそうだ。O本さんとは私の記憶なども絡めながら、和気あいあいと話ができた。O本さんは今日朝5時から6時半まで雲と山を撮るためにシャッターを押し続けると浄土山から雄山に掛けての雲は今までとは違って、大会時の撮影では初めて見る珍しい雲だったと写真を私に見せながら、話された。このような写真は私も撮ったが、数多く見せてもらおうと何か不吉な予感にも思えた。O本さんはこれから白馬大池に向かうと話されていた。そういえば、大会朝に吉野家に弁当を買いに行った時、朝食を食べられていた男性がO本さんだったが、その話をするのを忘れていた。

今年は富山駅に余裕を持って到着。11時16分発なので、10数分も時間の余裕があった。いつもは翌日も登山のN谷さん、がつつくんだが、今回は一緒にサンダーバードで帰ることになり、賑やかな車中



となった。昼食は缶ビールを飲みながら、マスとブリの寿司、マスは美味しかったが、ブリはもうひとつだった。ここ2年は普通電車を乗り継いで帰ったので、特急サンダーバードの乗り心地はさすがに違った。

敦賀を出て琵琶湖が見えてから、京都までは長い。湖西線から見える琵琶湖は全くの逆側からの眺めになるので雰囲気の違い、別世界みたいだ。「浅井三姉妹・江」に出てくる豊臣秀次が築いた八幡山城のあった「八幡山」が平地からぽっこり突き出ているのが印象的だ。京都には14時09分に到着。京都はとりあえず暑い。ここでみんな流れ解散だ。

15時に家に帰って、写真をPCに移したりしながら、ネットを見ると28日午前、剣岳で転落事故が相次ぎ1人が死亡、2人が大ケガをしたとあった。午前8時50分頃、剣岳の早月尾根の通称「カニノハサミ」の登山道(2950m)付近で出勤中の山岳警備隊が登山者の転落事故を目撃し、救助。転落したのは地元・富山県上市の59歳の男性で単独で剣岳山頂を目指していたと見られ、ヘリで救助されたが、死亡が確認された。

また、この事故の約50分前には早月尾根の同じ「カニノハサミ」付近で落石があり、男性1人と女性1人が肩や手首の骨を折る大ケガをされた。それは、まさに我々が室堂にいた時のできごとで、あの雲は不吉な予感をさせる雲だったのか？。それを知った時、身体が硬直しそうになってしまった。

7回目の立山を終えて

7回目の立山、3回目のウォークは終わった。下界に下りると室堂は極楽のような、全てを忘れさせてくれる別世界だった。文明も何もいらない。ここにいること、ここまで自分の足で来られたこと、衰えた、衰えたと思いながらもまだまだできる自分自身を確かめられたことに感謝する。

辛くて心臓が停まる思いの一の越までの上り、厳しい道のりの雄山山頂、雷鳥荘までの尾根、今回は龍王岳の山頂など、また新しい思い出の1ページを刻むことができた。下界から離れ、2450mの世界にいと何もかもが小さな世界で、大きなものを見てしまうと山のように心も大きく持たなくてはならないと感じる。